地域医療のあす

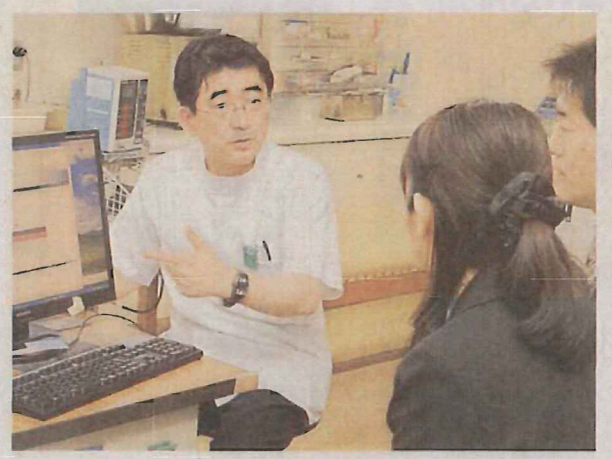
第15部

先進地の取り組みに学ぶ

④長崎・あじさいネット

情報共有で患者負担減

密な病診連携 現場に活路



「あじさいネットは診療に欠かせない」と話す奥平定之医師。ITが病診連携強化を促す＝長崎市梁川町、奥平外科医院

「あじさいネットですか？ 日常診療に欠かせないツールです」

JR長崎本線の終着・長崎駅。その一駅手前の浦上駅で下車し、徒歩10分のところに構える奥平外科医院で、奥平定之医師(50)が端末機の画面に見入っていた。

服薬履歴、血液検査の結果、エックス線の画像、医師の所見…。主治医の奥平医師が基幹病院に紹介し、ネット閲覧を承諾した患者15人の経過がたちどころに分かる。

診療科は外科、整形外科、消化器内科。1日1回は、市内の長崎大医学部付属病院や日赤長崎原爆病院、さらに大村市の市立病院、長崎医療センターなど計14施設が更新する生の患者情報に目を凝らす。

「従来は患者を紹介しても経過が分からず、『いつ退院できるだろうか』というストレスがあった。今は退院に向け、在宅診療や通院の受け入れ準備ができる」

※ ※

高度IT(情報技術)を利用したネットワーク化が、医師不足などで疲弊する地域医療の現場に活路をもたらそうとしている。

最大のメリットは、同じ患者情報の共有化にある。複数の医療機関にかかる患者にとっては同じような検査の苦痛や薬の処方から解放される。

病院勤務医とかかりつけ医とのより密な連携が可能になり、「切れ目のない医療」が享受できる点も見逃せない。

長崎県の地域医療IT連携システム・あじさいネットは2004年、長崎市中心部から車で約1時間、諫早市を経由して着く大村市で誕生した。

当時、地元に拠点を置く長崎医療センターが電子カルテ導入を検討。大村市（人口約9万人）の開業医ら31施設をネットで結んだ。翌年、もう一つの基幹病院・大村市民病院も加わった。

システム化を推進した長崎大大学院の松本武浩准教授(49)は「ITを使って病診連携が活発化できないか、と考えた」と話す。

特徴は、長崎県医師会に拠点を構えるNPO法人「長崎地域医療連携ネットワークシステム協議会」が運営。委員会を毎月1回開き、利用者の要望を基に〝カイゼン〟を促す。

NPO法人の小尾重厚会長(63)は、こう強調する。

「第三者機関のNPOが客観的に評価することで、透明性が高まり、信頼度が高まる」

※ ※

7年目を迎えたあじさいネットは離島にも運用エリアを広げる。

長崎港から高速船で約2時間、五島列島の新上五島町（人口約2万2千人、高齢化率33・7％）にある公立上五島病院（12診療科、常勤医15人、186床）は11年7月、患者情報の提供病院になった。

八坂貴宏院長(49)は今秋、遠隔画像診断システムがあじさいネットに組み込まれることを踏まえ、「本土の病院を退院した患者のケアはもちろんだが、今後は遠隔画像診断の迅速化も図れる。脳卒中や心筋梗塞の患者の救命率向上に貢献できる」と期待を寄せる。

松本准教授は言う。

「薬局や福祉施設に加え、訪問看護ステーションや行政にも利用を広げ、地域医療の質を上げたい」

メモ

あじさいネット

患者情報を公開する情報提供病院と、診療所など情報閲覧施設とを結ぶ単方向の医療連携ITシステム。直近の利用は、情報提供14病院、情報閲覧144施設、対象患者2万549人。初期費用は情報提供が800万～1400万円、情報閲覧が8万円で、会費は情報閲覧施設のみ月4千円。島根県が来年度中の運用を目指すシステムのモデル。

松江・島根半

イワガキ名

松江市の島根半島沖合で養殖され、関係機関がブランド化に取り組むイワガキの試食会が18日、主要産地の同市島根町野井地区

松江市などがブランド